

# サー・トマス・ブラウン著

## 医師の信仰(その二)

生田省悟・宮本正秀 訳

### 第三十節

何とも不可解なのは、神託に関するこの話が靈や魔女の存在を疑う見解を世界から放逐しなかつたこと、即ち学識を備えた多くの人々が自らの形而上学を忘れて、被造物の階梯を破壊し、靈の存在に懷疑を抱くに至つたことである。<sup>(1)</sup> 私としては、魔女の存在を常に信じてきたし、今やそれを知つてもいる。<sup>(2)</sup> 魔女を疑う者は、魔女だけでなく靈をも否定し、遠回りにではあるが、結果としてある種の異端者と言うよりは無神論者となり果てている。己の不信心を打ち消すために靈の現われを望む者が靈を目にすることは決してないに違ひなく、また、彼らが魔女ほどの能力を持つこともあり得ない。既に悪魔は彼らを魔術に劣らないほどの致命的な異端に陥れているし、姿を現わすというのも、人を引き込むために他ならないのである。悪魔が人を欺く手段として用いる妄想の中でも、「取り換え子」<sup>(3)</sup>の手法ほど私を困惑させるものはない。私には、理性ある被造物が獣に姿を変えたなどとは信じられない。また、(その神性を試すべく)

キリストを誘惑し、石をパンに変えさせようとした悪魔<sup>(4)</sup>に人を馬に変えるほどの力があるはずもない。だが、靈が人間と肉の交わりを持ち、しかも男女を問わないというのは信じられる。靈が肉体を纏い、盗み、あるいは作り出し、老いさらばえた情欲を満たすに足る行為に走ることもしくは、より旺盛な肉欲を充足させるべき激情を抱くことも大いにあり得る。ただし、いずれの場合にも繁殖は起こるべくもない。従つて、ダンの部族が悪魔と交わつた結果として反キリストが生まれたとする見解<sup>(5)</sup>は滑稽なものに過ぎず、キリスト教徒よりはむしろユダヤの律法学者にふさわしい着想である。実際、悪魔に取りつかれる者もいれば、憂鬱の靈や妄想の靈に取りつかれる者もいると思われる。また、悪魔を隠蔽したり否定したりする者がいるように、神や善天使の現われをことさら言いたてる者もあろう。これについて言えば、先頃、虚偽が暴露されたドイツの娘<sup>(6)</sup>などは格好の実例を示してくれている。

(1) ラウジョイ(A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being*, 1936)を引き合いに出すまでもなく、ブラウンは無生物から人間・天使ないしは靈的存在

## 第三十二節

さて、それぞれの人間に定められたこれらの霊の他にも、(恐らくは)全世界にとって普遍かつ共通の霊が存在するのではないか。これはプラトーン<sup>(1)</sup>が唱えた見解であると共に、ヘルメウス派の哲学者たちの主張するところでもある。ばらばらに生きる個々を結び付け、単一の種とする共通の属性があるのならば、全ての種を統合すべき属性が存在しないことなどあり得ようか。とはいえ、私たちに共通する霊が私たちの内部で作用し、しかも私たちの一部を成してはいないことを私は確信している。それは神の霊、即ちあの高貴で力強い本質の放つ火であり火花である。また、それは諸霊と太陽の力を知らない存在<sup>(2)</sup>とを支える生命かつ根源的な熱であり、地獄の炎とは対極に位置する火に他ならない。まさしく、水面を覆い、六日の後に世界を孵化させたあの優しい熱、あるいは地獄の霧、恐怖、不安、悲哀、絶望の雲を追ひ散らし、心の領域を平静に保つあの輝きである。誰であれ、この霊からの暖かい風と優しい息吹を感じられぬ者を(たとえその脈搏を感じられたとしても)生きていると、私は敢えて言うつもりはない。疑いようもなく、この霊がなければ私は回歸線下にあるうと熱を感じず、太陽の中心に居を構えていようと光に与れないのである。

喘ぎつつも歩みを止めぬ太陽が  
蟹座の背後なる高き頂きに辿り着きしとき、

医師の信仰(その二) (生田省悟・宮本正芳)

煌々と燃ゆる天の熱に、凍てつきし海はひび割れ、  
堅氷の極地は弛む。

そのごとく、目には見えざる御身の輝きが  
我が凍れる心にまたしても夏至の到来を告ぐれば、  
我が冬は終わり、萎れたる我が魂は歌い、  
この身ごとくとく麤りて春を迎える。

されど、生命育む御身の輝きもほどなく陰れば、  
小球なるこの身、祝福の光を失い、  
冷たき霜に四肢は震え、

六月の最中に極月の思い。

ああ、我が土の性、いと低き住まいによりて  
高貴なる魂を何と貶めるたるや。

魂の属性なる翼は常に高みを目指し、  
初めて火を得し所に至らんとするに。

我が胸に宿り、私の感ずるこれらの炎は御身の輝きにあらで、  
地獄からのものに他ならず。

ああ、これらの炎を消し去り、御身の清らなる輝きを  
我が卑しき小球の太陽のごとく成し給え。

また、篤信の憧憬を塞ぐ土煙、  
そを御身の清らなる御霊に帰依させ給え。

(1) 『ティマエオス』四一d—e。

(2) 魂のこと。魂は、その発生に際して熱を必要としないと考えられていた  
(3) 『創世記』一・二。

(4) マーティンでは beat とされている語を beat に置き換えて、「熱」と訳出した。他に参照した版の全てが beat としていることに加え、前後関係から判断しても、マーティンのものは誤植だと思われたからである。

### 第三十三節

従って、私には靈の存在を否定するつもりなど毛頭なく、全ての国々はもとより、各人がそれぞれ守護天使を戴いていると容易に信じられる。これはローマ教会の新たな見解ではなく、既にピータゴラスやプラトーンが唱えていたものである。そこに異端は認められず、聖書に明確な定義がある訳ではないにしても、人生における身の処し方や振舞い方を正しく健全に導く有効な見解であり、凡庸の哲学では解決し得ない多くの疑問を克服するための仮説としても役立つであろう。さて、靈の属性にまつわる私の見解や形而上学を尋ねられたならば、全く浅薄な形しか持ち合わせていないと告白しておこう。また、その殆どが神に関する見解と同様に否定形に基いていたり、あるいは人間と他の被造物との比較によっていたりしている。この宇宙には被造物の階段、即ち明確な階梯が存在し、しかも、それは無秩序に混乱したまま上昇していくのではなく、整然とした調和に従っているからである。ただ存在するだけの被造物と生命を持ったものとの間には、属性においてかなりの隔たりがある。植物と感覚を持つ被造物即ち動物との差はさらに大きく、また動物と人間との隔たりは遙かにそれを凌ぐ。この比率が当てはまるとすれば、人間と天使との間には一層大きな差があるに違いない。私た

ちは天使の属性を把握するには至っておらず、ボルピュリオスの最初の定義を用い続け、不死性によって天使と私たち人間を区別している。墮落するまでは人間も不死であった。だが、人間は天使とは異なった本質を備えていたと断言せざるを得ない。従って、天使の属性について定かでない以上、不明瞭ながらも私たちの内に何らかの完全性を認めたおりに、天使もそれを全き形で絶対に持っているとしたスコラ学派の論法は悪くはない。天使は瞬時に理解する能力を備え、私たちが研鑽と熟慮の末になし得ることを理性の最初の働きによって遂行してしまうと思われる。さらに、事物をその形相で識別し、私たちが付帶的性質や特性に基いて記述する事柄を本質的な差異によって定義付ける。だとすれば、私たちにとつての蓋然とは、天使には自明のことかもしれない。天使は個々の存在の形相を種としてだけでなく個別にも理解しているばかりか、個々の本質が固有の差異を保持することで（それが属する種との関係に加えて）固有の自己を発現するという経緯をも熟知しているに違いない。魂は肉体に宿り、それを動かすが、いかなるところにも宿らないといえ、天使もあらゆるものを動かすことが出来る。私たちの場合は時間、場所、距離の制約を受けるが、ハバククを獅子の洞窟に運び、ピリポをアゾトへ導いたあの見えざる手はこの規制の枠を超え、人の及ばぬ移送の手段を備えている。天使には直知の才があり、それによって互いの心中を鏡に映し出すように把握し合っているとすれば、天使が私たちの考えをほぼ見通しているとすると、一概には否定出来ない。聖者への祈りに反駁を加えるために、聖者が下界の事情など承知しているはずもないと唱えた者たちは身のほどをわき

まえてはいなかったのだ。そこで、「一人の罪人の改悛に際し、天上なる天使たちは喜ぶ」という聖書の一節を十分に説き明かすことが出来るまで、私の見解は御容赦願わなければならない。あの偉大な教父に従って考える人々とは異なり、私には、「光あれ」という第一日目の御業が天使の創造を意味すると確信を持って解釈することが出来ない。<sup>7)</sup>とはいえ(告白すれば)、天使の属性を太陽や四大の光ほどに間近から垣間見た被造物はいないのである。私たちは光を付帯的性質の一つに過ぎないとしている。だが、単独で存在しているからには、光は一個の靈的実体であり、天使であるかもしれない。要するに、見えざる光を思い浮かべるがいい。それが靈なのだ。

- (1) ディオゲネース・ラエルティウス『哲学者伝』八・三二。
- (2) 『バイドン』一〇七d、『ディマエオス』九〇a。
- (3) マーティン三〇二ページによれば、『序説』三・六においてボルビュリオスが示した、「理性的かつ死すべき動物」という人間の定義を踏まえている。
- (4) 経外典『ベルと龍』三六、三九。
- (5) 『使徒行伝』八・三九—四〇。
- (6) 『ルカ福音書』一五・七、一〇。
- (7) アウグスティヌスは『神の国』一一・九において、『創世記』一・三の「光あれ」が天使の創造を意味するという解釈を示している。また、同書二一・三二には、その解釈に反論する者がいたとしても、敢えて論争するつもりがないといった趣旨のことを述べている。

### 第三十四節

確かに、これらの靈は創造主の会心の傑作、無から作り出された花あるいは最良の品(とでも言うべきもの)であって、現実存在している。私たちはただそれを希求して止まず、そのようなものになり得るのではないかと思うばかりである。唯一、私たち人間だけが肉体的本質と靈的本質とを兼ね備えた両棲類的存在であり、これら二つを結ぶ中間の形として、神と自然の秩序を確固たるものになっている。人間は肉体と靈という両極から生じた訳ではなく、それらを介する共通の属性により、両立し得ない双方の隔たりを繋ぎ留める。人間が神の息吹かつ似姿だというのは論ずるまでもないし、聖書に記述されている通りであろう。だが、私たち自身を小宇宙ないし小世界と称するのは、当初、私には単に聞こえの良い修辭上の文彩としか思えなかった。やがて、精密な判断と再考とを重ねた結果、そこに紛れもない真実が含まれていることを知るに至ったのである。まず、私たちは一個の粗雑な塊として存在する。即ち、ただ存在するばかりで、未だ生命を持つことも許されず、感覚や理性を授かることもない単なる被造物の一員としてこの世にある。その後、植物、動物、人間としての生を重ね、最終的に靈としての生を受ける。即ち、一つの神秘的な属性を保持したまま、全世界に留まらず全宇宙を網羅する五種類の存在を順次経験するのである。かくして、人間は偉大な真の両棲類であり、その属性は他の被造物のように四大のそれぞれに生きるばかりでなく、種を異にするさまざまな世界

に生きるのにも適している。感覚には一つの世界しか存在しないが、理性には可視と不可視の二つの世界が存在するからである。モーセは不可視世界のことを何も記していないばかりか、可視世界についても曖昧な記述しか残してはいないらしく、その結果、未だに論争を呼んでいる箇所さえある。<sup>2</sup> 実を言えば、私自身、『創世記』の冒頭数章のかなりの部分が不明なままであることを告白しなければならぬ。もともと、神学者たちは人間の理性の及ぶ限り、全てを字義通りに収めようと努めてはきている。とはいえ、寓意的な解釈もまた可能であるし、エジプト人の象形文字を学んで育ったモーセも、<sup>3</sup> 恐らくそのような神秘的手法を用いていたのではなかったろうか。

- (1) 『創世記』一・二六、二・七、『ヨブ記』三三・四。
- (2) 周知の通り、『創世記』はモーセ五書の一つであり、かつてはモーセ自身の著作とされていた。『創世記』一において火に関する記述が欠けていることを、ブラウンは指している。
- (3) 『使徒行伝』七・二二。

### 第三十五節

さて、非物質的世界については、遙か彼方の第一動者<sup>1</sup>にまで思いを馳せることもあるまい。物質で構成されているこの世界においてさえ、天空の最外周の彼方<sup>2</sup>にいる場合と同様に、霊は時間、場所、運動の状況に左右されず、自由に闊歩しているからである。肉体という物質的要素よりも深くを探ろうではないか。第一要素たる質料

因に留まることなく事物を分析すれば、天使の住まいが見出せるに違いない。天使を至るところ遍く存在される神の本質と称しても、神のお怒りを買うことはないと思われる。世界が創造される以前、神は万物そのものでおられたからである。神は、天使のための新たな世界、あるいは定まった住まいをお創りにはならなかった。従って、天使は神の本質がおられるところに常にあり、たとえ遠くにあるうとも神ご自身の中に生きている。神が万物を人間のためにお創りになられたというのとは、ある意味において真実である。とはいえ、天使が奉仕する霊<sup>2</sup>として、この卑しい下界の俗事において神のご意志を実際に完遂したり、あるいは進んでそのように努めたりするからといって、神が人間の創造を、さらに純粋な被造物である天使の創造に優先された訳ではない。神はご自身のために万物をお創りになられたのであり、ご自身の栄光以外の目的で万物をお創りになれることなどあるはずもない。神がお受けになられるのは栄光をおいて他になく、神ご自身の外には栄光だけが存在する。名譽とは外から加えられるものであり、受ける側ではなく、捧げる側に属している。従って、賞賛をお受けになるために、神は被造物をお創りにならなければならなかった。その被造物こそ、かの世界にあつては天使であり、この世界にあつては人間なのである。このことをおろそかにすれば、私たちは自らが創造された本来の目的を忘れることになる。そのときには、神は当然お怒りになり、世界をお創りになられたことばかりか、世界を破壊しないとの誓いを立てられたこと<sup>3</sup>を悔やまれるであらう。世界が一つしか存在しないというのは、信仰によって得られた結論である。アリストテレスは彼の哲学を

もってしてもこれを証明出来なかつたばかりか、世界が永遠であることについても説得力を欠く論証しか残してはいない。<sup>(6)</sup> 古代の哲学者の筆を大いに悩ませたこの議論ではあったが、モーセはこれを解決している。創造という新たな用語によって、即ち無から有を生じさせると考えることで、全ての説明が可能となる。では、無とは何か。無は有の対極をなすもの、さらに厳密に言えば、神と正反対のものである。神だけが存在しておられる。他は全て神に依存することと存在を獲得し、特性を賜って初めて有となるに過ぎない。この点で、神学は哲学と一致している。発生のみならず創造も対立に基いており、万物である神と無との対立により、無から万物が創り出されたのであった。このようにして、無は有となつた。全てを包括されるお方が無に形を授けられ、存在へと変えられたのである。

(1) プトレマイオス派天文学における天空の最外層で、地球、月、太陽、諸惑星の層を全て包み込むとされた。

(2) 『ヘルム』一・一四。

(3) 『箴言』一六・四。

(4) 『創世記』六・六。

(5) 同書九・一一。

(6) 『天体論』一・八一九、一〇一一。

### 第三十六節

あらゆる創造は神秘であるが、とりわけ人間の場合は格別だと言

医師の信仰 (その二) (生田省悟・宮本正秀)

える。他の被造物は神のお口から息が発せられた瞬間に創られ、神がただその名だけを発せられるや否や無から生じた。だが、(聖書の記述によれば)人間を形作られる際、神は賢明な作り手を演じられ、創造というよりもむしろ製作を行なわれた。他の被造物の素材を神が区分けされたときに結果として形と生命が一体となって生じたのに対し、人間の外壁を築かれた後に、神はご自身に似た実体、即ち不朽かつ不死なる魂の創造という第二のさらに困難な仕事に着手されることとなった。魂のこれら二つの属性については、異教徒の哲学や見解が伝わっている。プラトンはこれを明確に肯定している<sup>(3)</sup>、アリストテレスも否定してはいない。<sup>(4)</sup> なお、(魂の生成については)神学から投げ掛けられたもう一つの問題があり、ドイツでは学者たちがそれを盛んに論じ合っている。ただし、その論争は互いに偏らず公平を求めるといった性格のため、未だに決着を迎えてはいない。私には同意し兼ねるが、バラケルススは大胆にも交接を用いずに人間を作り出す処方方を公にしている。<sup>(5)</sup> とはいえ、魂の伝移を否定する人々が多いことにも驚かざるを得ない。なにしろ彼らは、「創造において注入され、注入において創造される」というアウグスティヌスの修辭的な交錯配列法から成る一文以外に、自らの信じるところを支える論拠を持たないのである。いずれの見解も信仰と十分に両立し得ると思われるが、一点の異論に取りつかれてさえないければ、私はどちらかと言うと伝移説に傾きたい。その異論とは、思索や精緻な考察からではなく常識と観察に由来し、誰か他人の著作から摘み取られた訳でもなく、雑草や毒麦に等しい私の頭脳で育まれたものに過ぎない。これは、人間と獣の交接によって誕生した

属性の定かでない怪物から得られた結論なのである。<sup>(8)</sup> 仮に魂が両親の種を通して伝えられ注入されるのではないとすれば、単なる獣が生まれてくるだけで終わるのではなく、理性には全くふさわしくないはずの諸器官に理性の名残りや痕跡がかなり明白に認められるのはどういふことなのか。この肉体という地上の住まいに宿る魂が、全ういかなる意味においても器官を備えていないにも拘らず、その通常の機能を果たすには、各器官の調和と適切な配置だけでなく、その作用に呼応する組成と気質を必要としているというのは、言下で否定出来ないことに違いない。とはいえ、この肉の塊という目に見える構造が魂の道具だとか、魂の宿るにふさわしいものかどうか言うことは出来ない。それは、むしろ感覚のためのもの、即ち理性の手なのである。私たちの行なう解剖研究には、多くの神秘的な哲学が含まれており、異教徒をも神の下に引き戻している。<sup>(9)</sup> だが、人体の構造に認められる珍しい発見や興味深い事柄のうち、私が何にもまして満足を覚えるのは、理性を備えた魂のための器官や道具が見当たらないことである。理性の座と称される頭脳にも、獣の頭蓋に見出せる以上の重要なものは含まれてはいない。この事実、少なくとも私たちが通常受け止める意味において、魂が器官を持たないことを示すはずの合理的かつ考慮に値する論拠となる。このようにして、私たちは人間として生きている。しかも、いかなる方法によるのかは不明であるが、私たちの内には何ものかが宿っている。それは私たちの外においても存在することが出来るばかりか、私たちの死後も生き続けるに違いない。ただ、奇妙なことにその存在は、私たちの誕生以前にそれ自身が何であつたのかを記した歴史を持た

ないばかりか、いかにして私たちの内に入ったのかを伝えることも出来はしない。

- (1) 『創世記』一・三一―四。
- (2) 同書二・七。
- (3) 『バイドロス』二四五c、『バイドン』一〇五。
- (4) 『靈魂論』二・四、三・五、『生成消滅論』二・三。
- (5) 以下の論議にある通り、靈魂伝移説と靈魂創造説のいずれを採るかという問題。
- (6) 『事物の本性について』一。
- (7) 実は、これはペトルス・ロンバルドゥス『命題集』二・二七・二からの引用であるらしい。
- (8) 人間と獣の雑種が存在することは、コンラード・リコステネース『怪異・不思議年代記』(二五五七)などの書物を通して知られるようになったらしい。
- (9) ガレーヌスは、創造主の知、力、徳を示すために『人体各部の有用性について』を著したという(三・一〇)。

### 第三十七節

復活する以前の魂を幽閉していると覚しいこれらの肉体という壁は、四大の合成物、即ちやがては灰に帰す定めの組成物以外の何ものでもない。「人は皆、草である」ということばは比喩的にだけでなく、字義通りの意味においても真なのである。それは、私たちの目にする生き物がいずれも野の草だと言えるからに他ならない。その

草が彼らの体内に取り入れられて肉と化し、あるいはさらに遠回りをして私たちの内でも肉となるのだ。いや、それどころか私たちは誰もが忌み嫌うアントローポファギ即ち食人種、しかも他人だけでなく自らをも食する食人種でさえある。これは明白な真実であり、単なる寓話などではない。私たちの目に映るこの肉塊は口から私たちの内に入ったのであり、私たちの眺めるこの肉体も、かつては食卓の平皿に盛られていたからである。要するに、私たちは自分自身を食ってきたのだ。私には、ピータゴラスの知恵が明確かつ字義通りの意味で魂の輪廻、即ち人間の魂が獣に転移するというあり得ないはずの現象に確証を与えたなどとは信じられない。あらゆる変容と転生のうちで、私が信じているのは唯一、ロトの妻のそれだけである。

ネブカドネザル<sup>3</sup>の場合は、転生と呼べるほどのものではないからだ。これら以外の場合についてはいわずとも、含蓄的意味と教訓とに込められた真実性以上のものは認められないのではないか。私の信じるところでは、獣の肉体は全て滅び、その死後には、形を与えられ生命を授けられる以前と同じ状態に置かれるが、人間の魂が退行や腐敗を被ることはない。また、それは肉体を超えて存在し、特権として授かっている固有の属性によって、奇跡を俟つまでもなく肉体の死後も生き続ける。信仰に篤い者の魂は、地上を離れると天上にところを得る。死者の亡霊や幽霊はさまよえる人間の魂ではなく、私たちに災い、流血、悪行へと誘い込み、せき立てる悪魔どもの不穏な歩みである。その上彼らは、祝福を受けた霊も墓中で安んじている訳ではなく、この世の状況を気にかけてつさまよっているのだという思いを私たちの胸中に密かに浸透させようとする。これらの幻

影がしばしば出現し、とりわけ墓地、教会、納骨堂に出没するのは、そこが死者の眠る場所だからである。そして、悪魔は不遜な戦士よろしく、アダムを打ち負かした際の戦利品や略奪品を誇らしげに眺めているのである。

(1) 『イザヤ書』四〇・六。

(2) 『創世記』一九・二〇。

(3) 『ダニエル書』四・三三。

### 第三十八節

私たちの誰もがこの不幸な征服を嘆き、しばしば「(ああ)アダムよ、汝は何をしたというのか」と声を上げる。私は、細い絆やしがらみによってこの世に縛られておらず、生を溺愛したり死の名に震えおののいたりしないで済むことを神に感謝する。とはいえ、死の恐怖や忌まわしさを感じ取れない訳ではないし、死者の臓物を腑分けし、ミイラ、骸骨、亡骸を常に目にしているからといって、死体運搬人や墓掘り人のように感覚が麻痺することもない。死の不安を忘れることもない。ただ、死の忌まわしさを列挙し、その極端な例に思いを巡らせたとしても、確固たる信仰をうちたてたキリスト教徒の場合は言うに及ばず、一個の人間の勇気を挫くものなど見出せないのである。従って、私は始祖の過ちを腹立たしくは思わないし、万人に共通する運命に従いつつ、優れた父祖たちと同じように死んでいくこと、即ち息絶えて四大に別れを告げ、一瞬無となり、



そして一個の霊となつていくことに氣後れがしているのでもない。私自身をさまざまに省みると、理に叶った仲裁者であり公平な裁定者でもある死がなければ、私ほど惨めな人間はいないと思われてくる。私の希求するもう一つの生がなければ、この世のいかなる虚栄も私に一瞬の呼吸さえ行なわせることはあるまい。悪魔が私の信仰に働きかけ、決して死ぬことはないと思ひ込ませたとしても、その思いが消えるのを待つまでもなく、私は死を選ぶに違いない。私はこの万人に共通する生き方、太陽と四大に従属する生き方を全く卑しいものと見做すばかりで、これが人間であることの所以だとも、人間の尊厳にふさわしい道だとも考えていない。より良き生を期待するからこそ、この世の生を忍耐強く受け入れられる。その一方で、突きつめて考察した場合に、死が望ましく思われることもしばしばある。私は死を軽蔑する人に敬意を抱きこすれ、死を恐れる人をそれほど好ましいとは思っていない。当然ながら、私は兵士を好ましく思うし、指揮官の命令に応じて命を投げ出そうとする、ぼろを纏った無残な姿の軍勢を称えてもいる。異教徒には、この世の生を受する動機があるのかもしれない。しかしながら、キリスト教徒でありながら死に心を乱してしまふ者が、現世にこだわり過ぎているにせよ、来世に期待を抱いていないにせよ、自ら陥つたその窮地をいかに脱するのであろうか。私には分らない。

（一）経外典『エズラ第二書』七・四八。

### 第三十九節

アダムが年齢的、体格的に成熟した人間として創造されたと考え、彼はそのとき三十歳であつたと算出する神学者もいる。確かに、私たちには自らの年齢を計算することなど及びもつかないし、誰もが自分で思っているより数か月分ほど多くの時を経てきている。あの別の世界、即ち真の小宇宙とも称すべき母胎の中で生きて動き、存在を獲得すると同時に四大の活動に従属し、病の被害にさらされるからである。混沌とした状態に置かれ、諸原因の胸で眠っている間に誰もが共通して保持すると考えられる存在の他に、私たちは三つのそれぞれ異なつた世界で存在と生命とを享受し、極めて明確な段階を経験する。母の子宮という暗い世界で過ごす時間は月単位で計算すれば短い、太陽を見上げる多くの生き物に許された日数よりは長い。私たちはそのときすでに生命、感覚、理性を付与されていると思われ、その働きを発揮するためには、対象と出会う機会を待たなければならぬ。そして、植物の根ないし植物的魂と同様の生を送ると思われる。その後、この世の舞台上で登場すると、私たちは起き上がって別の被造物となり、人間として理性的な活動を行ない、臍ながら内に備わる神に似た部分を示すのである。だが、それを十分かつ完璧に発現させるには、私たちの後産とも言ふべき肉体の殻をさらに投げ捨て、最終の世界に産み落される時を待たなければならぬ。その世界こそ、聖パウロがことばに出来ない場所と語つた<sup>1</sup>、靈にこそふさわしいところなのである。（完全に精製

された黄金にも勝る) 哲学者の石にまつわる私の知識は浅薄なものでありながら、神性についてかなりのことを教えてくれたし、魂の不滅の本質と不朽の実質がしばしの間人知れずこの肉体の家で眠ることを、私の信仰に説き明かしてくれた。蚕で観察したあの奇妙で神秘的な変容によって、私の哲学は神学に変わった。理性を当惑させるかと思われるこうした自然の作用は何か神性をしのばせるものを含み、さらに凡庸な傍観者の目が発見する以上のものを孕んでいる。

(1) 『コリント後書』二二・四。

#### 第四十節

生来内気な私は、人と交わり、齢を重ね、旅を経験しても、厚顔で大胆な性格を得るには至らなかった。とはいえ、世間では稀と思われることではあるが、私は若干の慎みだけはわきまえている。即ち、(実を言えば) 死を恐れるよりはむしろ恥じているのである。死は私たちの属性の不名誉かつ不面目な点であり、一瞬のうちに、親友や妻子までもがおびえ、驚愕を覚えるほどに人間を醜く変えてしまう。元来人間を恐れ、人間に服従してきた野の鳥や獣も、死者に對しては忠誠を忘れ、餌として食ろうとする。まさにこうした思いから、私は風の只中で底知れぬ海の深みに飲み込まれることを願うようになった。そのときには私は人目に触れぬまま、哀れと思われすることもなく滅びていくであろう。誰も私に好奇の目を向けたり、

医師の信仰(その二) (生田省悟・宮本正秀)

同情の涙を流したりすることはないに違いないし、死すべき人間の運命を説き、「何と変わり果てた姿か」と言い立てる者もないはずである。私は、この身が骸骨になることを恥じているのではないし、どの部分についても自然が稚拙な技を施したなどと非難するつもりもない。また、恥ずべき病を患ったためにわが身を蛆虫の格好の餌として供することが出来ないなどと言って、己の自堕落な生を責めたりすることもあり得ない。

(1) ウェルギリウス『アイネーイス』二・二七四。

(2) 梅毒のこと。『ハイドリオタフィア』三にも、似通った表現が見受けられる。

#### 第四十一節

子孫に恵まれ、それが真実を最も正しく伝える年代記だと見做す人々は、死後も名前が語り継がれるであろうことに勇気を得て、極めて忍耐強く死と対峙したりする。子孫の中に存在し続けるという考えは私には単なる誤謬としか思われないうし、また、ひたすら来世を思う人にとつても、そのようなことを期待するのは決して似つかわしいものではあり得ない。より高貴な願いを抱くというのならば、名前や影が地上に残ることよりは天上で実質が生きていることを求めるべきである。従って、私は死に際してこの世に完全に別れを告げるつもりでいる。記念碑、歴史、墓碑はもとより、神の普遍の記録<sup>2</sup>以外の場所に私の名前がかろうじて記憶されることさえも願ってはい

ない。私はディオゲネースの遺言に賛同<sup>3</sup>するほどの皮肉家でもなければ、ルーカーヌスの

埋葬されぬまま横たわりし者は墓を求めることなし、  
宇宙こそ彼の墓なれば<sup>4</sup>

という大袈裟な言い方を容認するつもりも全くない。むしろ、冷静に判断してみれば、父祖の骨壺の傍らに眠ることを望み、速やかに朽ちることを願う真摯な思いこそ好ましいものである。私は鴉や小鴉の性質<sup>5</sup>、また大洪水以前に生きた祖先たちの長く退屈な日々を妬みはしない。占星術に幾許かの真実が含まれているのならば、私は五十年を過ぎても生き続けるかもしれない。未だに土星の周転が完結するのを見てはいないし、私の脈も三十年を数えてはいないのだ。とはいえ、一個の例外を除けば、ヨーロッパの王たちがごとごとく灰となり地中に葬られるのを見てきたし、三人の皇帝、四人のトルコ皇帝、多くの教皇と同じ時代を過ごしている。私は寿命を超えて生きていくのかもしれないし、太陽にも倦怠を感じてきている。喜びと対決の握手を交わしたのは血気旺盛な人生の絶頂期のことであつたが、今やその私には、時代の墮落が予見される。私にとつて世界は一個の夢や絵空事に過ぎず、厳粛な思いで省みれば、そこに生きる者は誰も老いばれた道化と思われるばかりなのである。

\* 己の亡骸を埋葬せず、鴉を追ひ払うための棒を手持たせて吊し上げよ、との遺言を友に残した。

(1) 例えばシェイクスピア『ソネット集』一一七番から読み取れるように、時に支配された人間が子孫を通して永遠の生を獲得するという考えは、ルネサンスの人々を捉えて止まないものであつた。

(2) 『ヨハネ黙示録』二〇・一五における「生命の書」を指している。

(3) キケロ『トウスクラーム論叢』一・四三。

(4) 『ファールサリア』七・八一九。

(5) ブリーニウス『博物誌』七・四八には、両種が長寿である旨の記述が見られる。

(6) 当時は、土星が三〇年で軌道を一周するとされていた。

(7) マーティン三〇四一五ページによれば、この箇所の記述に該当する人物は次の通りであるという。即ち、例外とはデンマーク王クリスチャン四世（一六四八没）、三人の皇帝とはロドルフ二世（一六二二没）、マティアス（一六一九没）フェルディナンド二世（一六三七没）、四人のトルコ皇帝とはアーメド一世（一六一七没）、ムスタファ一世（一六二三没）、オスマン二世（一六四〇没）、多くの教皇とはレオ十一世（一六〇五没）、パウロ五世（一六二一没）、グレゴリウス十五世（一六三三没）、ウルバヌス八世（一六四四没）である。なお、レオ十一世はブラウン誕生の約六か月前に没しており、厳密に言えば同時代人ではないが、第三十九節冒頭の記述を踏まえれば、ここに加えられることになる。

(8) 『マクベス』五・五・四九。

#### 第四十二節

思うに、救世主よりも長い生涯を求めたり、救世主が死を迎えるのにふさわしいとお考えになられた年齢<sup>1</sup>を超えて生きることが望んだりするのは、決して不埒な祈りではない。だが、（神学者が断言す

るように）天国においては誰もが白髪になることもなく、人間として完全な状態で甦るのだとすれば、人生の盛りを過ぎてまで現世に生き続けた場合、来世でその完全性を取り戻すにはさらに偉大な奇跡を必要とすることになる。即ち、現世で齢を重ねたとしても、その分来世で後退しなければならぬのだ。悪徳が減んだ後もながらえ続け、罪から解放される時が望めるのであれば、メトセラの長い生涯には膝を屈して請い願う価値もあろう。とはいえ、年齢は私たちの属性を正すどころか、むしろそれを歪め、邪な気性をさらに劣悪な習性に変え、（疾病のように）癒し難い悪徳をもたらすのである。日々老いさらばえていくにつれ、私たちは罪深さを増し、過ごした月日が多いほど、犯した罪も数え切れなくなっていく。四十歳で犯した過ちは、年齢以外に何ら変わるところがないにしても、十六歳における過ちと同じではあり得ない。むしろ、齢を重ねたことで、罪深さは倍に膨れ上がっている。身に染み付いた許し難い悪癖に加えて、判断力が成熟しているはずであることを考慮すれば、いかなる弁明も容赦も叶うはずがない。あらゆる罪は回数を重ねるごとに邪悪さを増し、時間の経過と共に、悪しき度合いも高まっていく。先へ進むにつれて常に増大し、算術の数字と同様に、最後に来るのがそれ以前のどれよりも遙かに大きくなるからである。二度の生を立派に過ごせる人以外に、一度の生を正しく送れる者はいないと考えるところではあるが、私自身に関して言えば、過ぎ去った歳月をしのぐほどの時間をこの先も生きていたい、あるいは日々の糸を始めから紡ぎ直したいなどとは思わない。このような言い方をするのは、キケロのことに<sup>(2)</sup>ばに倣って善き人生を送ってきたからではなく、

医師の信仰（その二）（生田省悟・宮本正秀）

さらに忌まわしい生き方をするのではないかと恐れているからだ。成長を遂げる判断力が日々私をより正しい方向へ導くかたわら、御し難い感情と根強い悪癖が日毎私を墮落させていく。齢を重ね、落ち着きを得た現在でさえ、若い頃に見出したのと同じ過ちが認められる。当時、多くの罪を犯したのは、私が子供だったからである。しかも、依然として罪を繰り返しているからには、私は今も嬰兒のままである。従って、人は老いの日々を迎える前に再び子供に戻り、六十歳を前にアイソーンの薬浴<sup>(3)</sup>を必要とするのではないか。

（1）『ルカ福音書』三・二三の記述から、伝統的にその年齢が三十三歳だと推定されていた。

（2）キケロ『老いについて』二・三八四には、「私は徒に生まれたのではない。私は生きて、このような思いを得た以上、私自身の生を悔いたりはいしない」とある。

（3）オウィディウス『変身譚』七・一五九―一九四。

#### 第四十三節

人の生涯が六十年に及ぶとき、そこには紛れもなく神の摂理の偉大な働きがある。それほどの年齢に達するには、優れた体質以上のものが要求される。生命の根幹を成す体液には七十年を生きるのに十分な油が含まれているにも拘らず、三十年を超えて生命の光を発することが許されない場合もある。書物の一巻を費やしても、長寿の所以を網羅することは出来ない。身体各部に備わった根源的膏油、

即ち生命を司る硫黄に自らが支えられていると考える者も、アベルがアダムほど長く生きなかつた理由を明らかにしていない。だからこそ、私たちの生涯には密かな糸玉や縋れが存在しているのだ。人の生涯を定められるのは神の睿智であらうが、それを成就させ完成へ導かれるのは、決してお休みにならない神の摂理である。その下で諸靈、私たち自身、それに神のお創りになられたものの全てが、人知の及ばぬほど密かな手段に基いて神意を遂行している。だからこそ、およそ三十歳で亡くなった者を、早過ぎると言つて嘆くべきではない。この世の全てが減ぶのと何ら変わつてはいないからである。この世の万物が完成されたときにこの世の寿命が定められたからには、堅牢でみごとに構築された存在であらうと、その作りに見合うほどの長い存続期間を期待出来る訳ではない。当然ながら、全てを焼き尽くす最後の炎が六千年<sup>1</sup>を待たずに世界を滅ぼすこともあらうし、私でさえ、四十歳を前に死を迎えることもあらう。従つて、生命の糸を紡ぐ手は、自然のそれ以外にも存在する。災いをもたらす密かな力や謎めいた性質を持つ存在のことは言うに及ばず、私たちは自分自身の始まりも末路も知りもしない。私たちの歳月という線は夜に引かれ、さまざまな出来事は見えない筆によつて記される。この点について私たちは無知であることを告白しなければならぬが、ただ、それを神の御手と呼んだとしても、決して誤りではないに違いない。

(1) ブラウンは世界が紀元前四千年に創造され、紀元後二千年まで続くというタルムツドの伝統的な考えに従っている。これについては、後出の第四十

六節の他に、『ハイドリオタファイア』五、『伝染性謬見』六・一などの箇所でも言及されている。

#### 第四十四節

私はルーカーヌスによる次の二行に強く引かれている。学校で習得するような解釈が出来ただけでなく、理解も出来たからである。

我ら皆惑わされ、徒に求むるは

長寿による幸福の道、

狡猾なる神々がこの世の生を引き伸ばし、

死の幸福を隠すがゆえに<sup>1</sup>。

かの詩人には優れた詩行が多くあるらしいが、それを育んだのは彼のストア派的資質であつた。実際、ゼーノンの哲学やストア派の教義にも際立つた箇所があり、説教壇で語られたならば、現在の神学として通用するのではないかと思われるほどである。だが、中には極端に走り、人が自らの暗殺者となることを認めたり、自ら命を絶つたカトーの最期を大いに称えるといった例もある。まさにこれは死を恐れていないのではなく、生を恐れているのに他ならない。死を軽蔑するのは勇氣ある果敢な行爲である。だが、生が死に勝る恐れを掻き立てている場合には、敢えて生きることこそ眞の勇氣ではないか。この点に関し、宗教は私に高貴な実例を教えてくれた。クルティウス、スカエウオラ、コドルス<sup>2</sup>の勇敢な行爲でさえ、ヨブ

のそれに肩を並べるには至っていないからである。確かに、病の責め苦に匹敵するほどの苦痛はあるはずもなく、死それ自体の持つ短剣も、死に至る道、即ち死の序説の持つ短剣には及ばない。「死を求めずといえど、死を恐れず」<sup>(1)</sup>。仮に私がカエサル<sup>(2)</sup>と同じ信仰を抱いていれば、求めるところも同じはずで、病の拷問によってじわじわと切り刻まれるよりは、一撃の下に果てることを望むはずであろう。見るところが外観だけに留まる者は健康を生命の付属物と考え、病に罹れば己の体質に不満を言い立てる。だが、人体各部を精査した私は、その構造がいかに脆い組織維に依存しているのかを知っており、むしろ、絶えず患っている状態ではないことの方に驚かざるを得ない。また、死へ通じる扉が無数にあることを思えば、死が現に一度しかないことを神に感謝したい。私たちに死をもたらすのは病の災いや毒物の悪しき作用ばかりではないし、また火薬の炸裂や殺人のための新たな発明を数え上げたところで無駄なだけである。人を滅ぼす力は誰の手にもある。私たちは誰とでも出会い、顔を合わせるが、その人物が私たちを殺しはしただけなのだ。従って、残された慰めはただ一つ、最も弱い腕にさえ生命を奪い去る力があるとはいえ、最も強い腕でさえ私たちから死を奪い得ないということであろう。<sup>(3)</sup>神ご自身も死を免れたいとは思ひにならなかった。<sup>(4)</sup>肉体をお持ちでありながら、神は不死でおられるが、肉体のまま不死である事態の悲惨さを被ろうとはなさらなかった。確かに、この肉体の範囲内に幸福はあり得ないし、この肉眼で至福を捉えることも出来はしない。私たちの贖いの第一目こそ、死そのものに他ならない。かくして、悪魔の望みは叶えられなかった。私たちが死と共に

医師の信仰(その二) (生田省悟・宮本正秀)

にあることは、死を持たない場合よりも幸福だからである。悲惨は悪魔自身の内にあり、それは終わりを知らないことがない。だとすれば、ストア派<sup>(5)</sup>も、その見解において正しかったと言える。悲惨な境遇を嘆く者は、自分自身が死ぬことを忘れていた。死が私たちの手の中にある限り、いかなる惨禍も私たちを支配することなど出来はしない。

(1) 『ファールサリア』四・五一九—二〇。原文では、当該のラテン語二行が引用され、その下に英訳が四行にわたって示されている。

(2) マルクス・クルティウスは予言者のことばに従い、ローマの永遠の繁栄を願って広場の地割れに身を投じたという(リーウィウス『ローマ建國史七・六』。ムステイヌス・スカエウオラは苦痛に対する軽蔑を示すため、右手を火にかざしたという(同書二・一二)。コドルスは伝説上のアテナイ王。祖国のために、敢えて敵の手にかかったとされる(キケロ『トゥースクラム論叢』一・四八)。

(3) 『ヨブ記』二・九—一〇、一三・一四—一五。

(4) キケロ『トゥースクラム論叢』一・八。

(5) スエトニウス『ユリウス・カエサル伝』八七には、カエサルが「突然訪れる、迅速な死」を願ったとある。

(6) セネカ『ポエニケの女たち』一五三。

(7) 同書一五二—三。

(8) 言うまでもなく、キリストとして降誕したときのことを意味している。

(9) セネカ『神の摂理について』六・七。

#### 第四十五節

さて、この字義通りで現実を訪れる死以外にも、神学者の言及す

る別の死がある。思うに、これは禁欲して罪と世俗に別れを告げるなどといった、単なる隠喩的な意味のことではない。人は誰も、二つの十二宮図を所有していると考えられる。一つは人間としての事柄、即ち誕生に、またもう一つはキリスト教徒としての事柄、即ち洗礼に関わっている。私は後者に従って自らの眞の誕生を算出するのであつて、月食や閏日を数え上げたりはしないし、救世主の許に赴き、キリストの記録に載せられるまでは、自らを何者とも認めるつもりもない。こうしたキリスト教徒としての生を享受しない者は、たとえ肉体という知覚可能な属性を纏っていたとしても、私には幻影としか思われない。象徴的な意味で言えば、不死に至る道は日々死を繰り返すことである。髑髏を見つめたり骸骨を眺めたりしながら、それらがもたらす凡庸の想像に身を委ねたところで、死を正しく理解したことはないのではないか。だからこそ私は、広く流布している「死を忘れるな」ということを、キリストの教えに一層ふさわしい格言の「四つの終点を忘れるな」に敷衍した上で肝に銘じてきた。誰もが避け得ない四つの点とは、死、審判、天国、そして地獄である。異教徒の観照も墓の中で終わるのではなく、私たちとは異なつていながらも彼らには当然と思われる理由に導かれつつ、ラダマンテウスや死後の審判にまで及んでいる。彼らはどの巫女や神託から、世界が業火に包まれて滅ぶという預言を盗み出したのであろうか、不思議なことではある。また、ルーカーヌスは何を典拠として、次のように言い得たのであろうか。

世界に残されしは全てを包む一つの炎、

その中で、我らの骨も星々と共に薪とならん。<sup>(2)</sup>

八二

私は世界が終わりに近づいていると信じているが、だからといって、老いて朽ち果て、その根本原理の残骸の上に崩れ落ちるなどと思つてゐる訳ではない。創造の御業は自然を超えているが、同時に敵である壊滅をも超えている。壊滅することがなければ、世界は終わりを迎へたりせずに変転を続けるはずである。全てを焼きつくす眞の炎である神の息吹以外に、一体いかなる力が世界を滅ぼすというのか。私の哲学は何一つ教えてくれはしない。世界の創造に要した時間是一分に満たなかったし、その滅亡も同様であろうと考える者がいる。彼らにとつて、詳細に記述されている六日間は一瞬時に過ぎず、しかも、それは神が作業をどのような手順でお進めになられたかということよりは、むしろ神の睿智による大いなる御業の手段と觀念を明らかにしているというのであろう。終末の日に審判が催され、法廷召喚が行なわれるという問題について言えば、確かに聖書にはそのような意味が込められていると思われるし、字義通りの註釈を施す場合、現にそう考える者もいるが、私には夢にも考えられないことである。言語を絶する聖書の神秘は卑近かつ例証的な手法で伝えられることが多く、しかも人間に向けて書かれたものであるために、ありのままではなく、理解を得やすいように語られている。とはいへ、能力の違いからさまざまな解釈が生じたとしても、それらは私たちの信仰と両立するであらうし、まして個々の教化の障害となるはずもないと思われる。

- (1) ギリシャ神話における冥府の裁判官。  
 (2) 『ファールサリア』七・八一—四一五。

#### 第四十六節

さて、この避け難い時が何年の何月であるかを特定しようとするのは、有罪の裁きを受けるべき狂気に留まらず、明白な不敬でもある。エリヤの言った六千年<sup>1)</sup>をどう解釈すればいいのか、即ち天使にさえ明かされなかった秘密<sup>2)</sup>を神が一人の律法学者に伝えられた事態をどう想像すればいいのか。これは、デルボイの悪魔<sup>3)</sup>を困惑させ、怪しげで曖昧な言い方を強いたほどの優れた問いであつたはずだ。

しかも、過去のさまざまな占星学者の預言<sup>4)</sup>だけでなく、現在、憂鬱症に取りつかれた多くの人々のそれをも嘲つてきている。過去や現在の合理的な理解すらおぼつかないのに、未来を知ると主張する彼らは甚だしい憂鬱の症状を示し、新たな預言をもたらすよりも、古い預言<sup>5)</sup>を成就させる定めを受けているに過ぎないのである。『そのとき、戦と戦の噂が生じるであろう』<sup>6)</sup>ということは預言ではなく、発せられて以来、常に実証されてきた不変の真理としか私には思えない。『月と星に兆が認められよう』<sup>7)</sup>との預言がある。だとすれば、キリストがご自身の到来を暗示されているはずなのに、なぜ盗人のように夜中にお出でになる<sup>8)</sup>のか。反キリストの出現についての啓示<sup>9)</sup>から引き出される一般的な兆は、他の何と較べても判然としてはいない。私たちが通常推察するところでは、反キリストは多年にわたり現われてきたことになる。私の立場から率直に言えば、反

キリストは神学における哲学者の石と思われなくもない。その発見と発明に関しては法則が規定され、もっともらしい導き方が提示されていながら、それを完全に発見した者など皆無だとさえ言えるからである。世界が終わりに近づいているという広く知られた見解は、私たちの時代に限らず、過去のあらゆる時代をも支配してきたはずだ。聖者たちが祭壇の下でおずおずと訴え続けたように、この世を去ろうとする魂も「主よ、いつまでなのですか」と発せざるを得ないのでないか、そして大いなる贖いの時を待ち望む余り、呻き苦しむのではないか。私には、それが懸念されてならないのである。

\* そのとき、嘘つきと偽り言者が訪れるであろう。

(1) 第四十三節訳註(1)を参照のこと。

(2) 『マタイ福音書』二四・三六。

(3) 第十三節訳註(2)を参照のこと。

(4) 『マタイ福音書』二四・一一、『マルコ福音書』一三・二二。

(5) 『マタイ福音書』二四・六、『マルコ福音書』一三・七、『ルカ福音書』二

一・九。

(6) 『ルカ福音書』二二・二五。

(7) 『テサロニケ前書』五・二。

(8) 『ヨハネ第一書』二・一八、『テサロニケ後書』二・三以降。

(9) 『ヨハネ黙示録』六・九—一〇。

#### 第四十七節

この日こそ、神の偉大な属性である正義が成就され、最も賢明な



人々を悩ませる解き難い疑念に決着がもたらされるに違いない。さらに、一見この世に存在すると思われる不公平と偏った配分が、来世では平等と正義の下に贖われるはずである。この一日にこそ、それまでの日々がごとく包括されている。そのときには、舞台の最終幕さながらに登場人物が勢揃いし、偉大な作品の大詰めを完結させなければならないのだ。この日の到来を心に留めておくことによつてのみ、私たちは闇の中にあつても誠実でいられ、誰の目に触れなくても高潔でいられる。「美德こそ美德の報い」というのは冷たい原理に過ぎず、私たちの変わりやすい意思を揺るぎなく不変な善の道へ導くことなど出来はしない。私はセネカの誠実な手法を實踐し、引き籠もつて孤独な想像に耽るおりでさえ、その人の前では悪に染まるよりも首を失うことを望むほど尊敬してやまない親友と共にあるのだと自らに言い聞かせ、悪徳の汚れを避けようとしてきた。だが、それによつて私が悟つたのは、道徳に叶う誠実さ以外には何も無いということ、また、最後に私たちに報いて下さるはずのお方のために善行を積むのではないということであつた。あの人物のように偉大な決意に到達出来るか、即ち天国と地獄を思わなくとも誠実でいられるかを試してみたりもした。そして、持つて生まれた性向と美德に対する生来の忠誠心により、私は、たとえ見返りが得られなくとも美德に奉仕し得ることを知つたのである。とはいへ、私の場合には意を決して立派に遂行するのではなく、性質の脆さから些細な誘惑に引き込まれ、美德を忘れることがあるかもしれない。だとすれば、私たちのあらゆる活動を支える生命と神髄は復活、即ち私たちの灰が敬虔な努力の結実を享受するという、揺るぎない

見解にある。それを欠いておれば、いかなる信仰も誤謬に過ぎず、ルーキアーノス、エウリピデース、ユーリアーヌスの不敬も瀆神であるどころか、微妙な真理となつてしまふ。さらには、無神論者こそが比類ない哲学者だという事態を迎えてしまふに違いない。

(1) セネカ『幸福論』九・四、クラウディアヌス『執政官マリウス・テオドルス伝』一などを踏まえた表現であるらしい。

(2) セネカ『道徳書簡集』二五・五一六。

(3) 同書一一三・三二には、「全ての人々に向かい、何にもましてこの点を説いておきたい。即ち、私が報酬を求めることなく正しく生きるべきだということを」とある。

(4) ルーキアーノス『虚言愛好者』一六には、恐らくはキリストを揶揄する箇所があり、エウリピデース『ヘラクレース狂乱』においては、不正不実等の科でセウスが非難されているという。また、ユーリアーヌスは、いわゆる背教者として知られるローマ皇帝のことである。

#### 第四十八節

死者がどのように甦るかなどというのは、私の信仰にとつて問題ではない。可能性のあることだけを信じるのは信仰ではなく、単に哲学である。神学においては、理性による推論も感覚による確認も出来ないことであつても、それが真理である場合が多い。また哲学では、理性による推論が不可能でも感覚によって確認される事象が多くある。たとえ理性が確固とした論証を行なつたとしても、磁針が北を指すことを人に信じさせることは不可能であるが、この現象

は起こり得ることであるばかりか現実のことでもあり、一つの実験を感覚に示しさえすれば容易に納得が得られるに違いない。私は、散逸した遺灰が再び一つになると信じている。塵となって分散した亡骸も変容を繰り返して、鉱物、植物、動物、四大に組み込まれるという遍歴の果てに、神のお声が発せられると元の姿に戻る。そして、再び結び付き、予め定められた当初の形態を構成するのである。天地創造の際に混沌とした塊が分離して個々の種となったのと同様に、種が滅亡するおりには、個別の存在に分かたれる事態が生じるであらう。私たちの目にするそれぞれの種は、創造のときには一個の塊の中に含まれていたが、その後、神の实り多いお声がこの無数から成る一個を個別なものへと区分けされた。終末の日には、それらの朽ち果てた亡骸が形相の散乱した荒野にまき散らされ、身に纏うべき本来の衣装を忘れてしまったかと思われるとき、神が力強いお声で元の姿に戻るよう命ぜられ、それぞれを個別の存在として呼び出される。そのとき、アダムの産み殖やす力、幾百万にも増えたあの精子の魔力が明らかになろう。日頃私は、水銀の人為的な復活と蘇生、即ち酸により一旦は千もの形状に分解されながらも、本来の姿に戻り元の特質に回帰することを、奇跡だと見做してきた。哲学者を真似て自然に忠実な言い方をすれば、変化し得る物体の形相は腐敗が認められた時点で滅びる訳ではない。また、私たちが想像するのとは異なって、その住まいから完全に撤退するのではなく、密かで何者も到達し得ない部分へと引き籠もり、敵の攻撃から十分に身を守っているのである。思弁を重んじるスコラ学派の目には、灰と化した草や木が完全に破壊され、その形相も葉に永遠の別れを

告げたと映るであらう。だが、分別を備え、真理を見極めようとする科学者の考えるところでは、その形相は滅んだのではなく、不燃の部分に退き、火という食欲な元素の猛威から守られている。これは、植物の灰から植物を甦らせる実験、即ち燃え殻から茎や葉を復活させることによって証明される<sup>1)</sup>。人間の技がこれらの下等なものに対して行ない得ることを、神の御指が遙かに完全でしかも分別を備えた構造物に対して為し得ないなどと断言するのは、何という瀆神であらうか。これこそが神秘的な哲学に他ならない。真の学者はこれによって無神論に陥つたりはせず、むしろ紛れもない神学者となっていく。そして、自らの復活の予表を、エゼキエルのように夢においてではなく、目に明らかな対象のうちに見て取るのである。

(1) マーティン三〇八ページによれば、植物の灰の水溶液を霜に当てたとき、器に生じた模様が本来の植物の形と関連しているという俗説を踏まえているらしい。

(2) 『エゼキエル書』三七・一一四。

#### 第四十九節

さて、本来の姿に回帰した私たちに定められた住まいは、天国と地獄と呼ばれる、性質が全く異なり両立し得ない二つの場所である。それらを定義し、それらが何であり、どこにあるのかを厳密に規定するというのは私の神学の及ぶところではない。天国を垣間見たと思われるあの使徒も、それを語る際には慎重にことばを選び、人間

の目や耳が見聞したこともなく、人間の心にも捉え得ないところという否定形を用いた記述しか残していない。<sup>1</sup>彼は自らの肉体を離れて天国を見たために、元に戻ったときには、それを言い表わせなかったのである。聖ヨハネはエメラルドや貴橄欖石などの宝石によって描写してはいるが、私たちが目にするはずの天国の素材を伝えるには弱過ぎる。要するに、魂が全き幸福を存分に享受するところ、あるいは霊の限らない欲望が完璧に満たされ、新たに何かが加えられたり変化が生じたりすることを一切求めないようなところ、それが真の天国ではあるまいか。限らない善によってご自身の望みだけでなく、私たちの満たし難い願望をも終結させて下さるあの存在を享受する場所にこそ、天国があるに違いない。たとえ感覚で捉え得るこの世界の圏内であれ、ともかく神がお姿を現わされるところに天国は存在する。従って、人間の魂はどこにしようと、あるいは肉体の枠に閉ざされていようと、天国にあると考えられる。また、肉体の中でその生を終えたとき、魂は自らの魂、即ちその創造主の内にながらえることが出来る。だからこそ、肉体の中にあろうと外にあらうと、聖パウロは天国にいたと言えるのである。天国が第十天を遙かに超えた最高天にあると考えるのは、世界の滅亡を忘れることに他ならない。感覚で捉え得るこの世界が減ばされるときには、全てのものがここにありながら、同時に彼方、即ち虚空と言うべき最高天にもあることになるからである。そのようなときに、敢えて天国がどこかなどと問うのは、神のおられるところ、あるいは幸せな御姿に与かる栄光が得られるところを尋ねることと何ら変わりはない。エジプト人のあらゆる学問によって育まれたモーセも、この

肉体の目で神を見ようと望み<sup>2</sup>、真理それ自体である彼の創造主に背理を行なうよう懇願したとき、哲学における大きな不条理を犯したのである。アブラハムの胸でデヴィエスがラザロと対話する寓話<sup>3</sup>に基いて、天国と地獄が隣り合っていると想像したり、これら二極が近接していると思ひ込んだりする者は、その栄光に与かった二人に關して余りにも粗雑な考えしか抱いていない。彼ら二人の目は容易に太陽の彼方を眺め、望遠鏡の助けを借りずに遙かな極みまで見渡しているのだ。栄光に与かった人に視力と対象を受容する能力が備わっているのだとすれば、その目で見える対象の種は、現在私たちが知性を行使することで認めているものと同じく、際限もないと考えられるからである。第十天の彼方に、即ちアリストテレスの哲学<sup>4</sup>の言う虚空に存在する二つのものは互いを眺めることが出来ないのではないか。対象から発せられる可視光線を感じに伝えたり運んだりする物体や媒体が介在しないからである。だが、伝達の媒体、あるいはその媒体を準備し配置する光が全般に欠けていながら、完璧な像が結ばれるのだとすれば、私たちの学問の法則を留保し、より絶対的な光学に基いて全てを証明すべきであろう。

- (1) 『コリント前書』二・九。
- (2) 『コリント後書』二二・一―四。
- (3) 『ヨハネ黙示録』二二・一九―二二。
- (4) 『コリント後書』二二・二―四。
- (5) 『使徒行伝』七・二三。
- (6) 『出エジプト記』三三・一八―三三。

(7) 『ルカ福音書』一六・二三。

(8) 『靈魂論』二・七。

## 第五十節

地獄の本質がどうして火だと言えるのであろうか。煉獄をどのようにに理解すべきなのか、あるいは魂の実質を餌食としたり清めたりする炎をどのように考えるべきなのか、私には分からない。聖書で述べられているあの硫黄の炎<sup>1</sup>は、現在の地獄ではなく、来るべきその姿であると思われる。地獄において、火は私たちの拷問を完璧なものに仕上げ、また、その圧倒的な力を誇示すべき物体ないし対象を持つであらう。神学の權威と称されている人々の中にも、地獄の炎が私たちのそれと同じ種類だと唱えるものがあるが、こうした見解は受け入れ難い。とはいえ、その炎が私たちの肉体を餌食としながらも、私たちを焼き尽くせはしないということの証明は可能である。この物質世界には、極めて強烈な炎にも屈することなく、火の作用によって燃焼し溶解したとしても、決して滅び去ることのない物体が存在するからである。私は、モーセ<sup>2</sup>がどのようなして実際の炎で黄金の子牛を焼成、即ち焼いて粉々の灰にしたのかを是非知りたいたいと思っている。黄金という神秘的な金属は、私が感嘆してやまない太陽と天上との属性を備えており、火の猛威にさらされたとしても熱くなり溶けてしまっただけで、決して消滅することがないからである。これと同様に、燃焼し揮発する私たちの肉体も、精練されて黄金に似たより堅固で不屈の性質を帯びたときには、たとえ火の作

医師の信仰 (その二) (生田省悟・宮本正秀)

用を受けたとしても決して滅びず、火の腕に抱かれていながら不死となるであらう。肉体がこの元素の作用だけしか受けないのであれば、多くのものが難を逃れるのは確実であるし、天だけでなく大地までもが、終わりを迎えるというよりは始点に立つことになると言える。現在の大地は土ではなく、火、水、土、空気から成る混合物であるが、来るべきそのときに他の成分が取り除かれることによって、それは本来の姿に一層近い物質、即ち灰のような様相を呈するに違いない。世界が火によって滅ぼされると唱えた哲学者たちでさえ、世界が完全に消滅して無に帰するなどは夢想だにできなかった。それは、地上の諸原因の及ぶところではあり得ない。火という元素の究極かつ本来の作用は、硝子化、即ち物体を硝子に変えるだけに過ぎないからである。だからこそ、現代の錬金術師の中には、全てが終末の炎で水晶に変わる、あるいは熱で硝子に変わると考え、これこそ火の最大の作用であると冗談めかしつつ唱える者がいる。「無に帰す」という言葉を恐れたり、神がご自身でお創りになられたものを破壊されるのではないかと懸念したりする必要はない。人間は小宇宙であり、しかも、その日には真の小宇宙として立ち現われるであらう。そのようにして人間が存在し続ける以上、世界が滅亡するなどとは言えないのである。現在、神の御目は大きく広がった実体としての世界を見渡されている。終末の日にはそれが、また恐らくは祝福を受けた人々の目が、世界をその縮図において、あるいは本質の凝縮された形において実際に眺められ、熟視されることであらう。たとえ人の目には見えなくとも、神の御目や私たちの悟性からすれば、植物の種には完全な葉、花、実が存在する。(感覚にとつ

てただ可能性として存在するものは、悟性にとつては現実に存在する。神はこのようにして万物を御覧になる。即ち、ご自身がお創りになられたものを、縮図においてであれ原寸大のままであれ、漏れなく見つめられる。また、世界が六日目の小さな縮図となつていようと、あるいは事物が広く散乱したままの五日目までの状態になつていようと、神はそれを限なく眺めてこられたのである。

(1) 『ヨハネ黙示録』二一・八。

(2) 『伝染性謬見』三・一四、『ハイドリオタフィア』三には、不燃性の物質として石綿(別名サラマンドラの毛皮)に関する記述がある。

(3) 聖書の記述に従えば、子牛は焼かれて粉々になったのではない(『出エジプト記』三二・二〇、『申命記』九・一二)。

(4) これ以降の論議における「縮図」は、前述の「小宇宙」としての人間を意味している。

## 第五十一節

誰もが地獄における火の責め苦と肉体の受ける極端な苦痛を語り、天国について述べたマホメットと同一の手法に基いて地獄を描写している。事実、地獄については盛んに語られ、広く人々の耳に響き渡っている。だが、仮にこれが地獄の恐ろしさを伝えるものであるならば、地獄は天国の対極と言うに値しない。天国の幸福は、それを最も良く理解し得る部分であるはずの不死なる本質、移し変えられた神性、神の領地、即ち魂に由来する。私たちは地獄を地下

に据えてはいるが、悪魔たちが歩き回り出沒するのは地表の辺りである。燃え盛る山の中に地獄があると考える人々の話が広く世間に知れ渡っているが、粗雑な理解力にはそのような場所が地獄を表わしていると思われるのであろう。だが、人間の心こそ、悪魔の住まいに他ならない。ときおり、私は自らの内に地獄を感じている。魔王が私の胸に宮殿を構え、悪魔の軍勢が私の中で甦っているのだ。アナクサゴラスの考えた幾つもの世界と同じく、地獄も数多く存在する。マグダラの女に七人の悪魔が取りついていたのであれば、彼女の地獄も一つだけではなかったのではないか。悪魔のそれぞれが己にとつて一つの地獄だからである。どこにいたかを問わず、悪魔には十分な責め苦が与えられているために、己を苛むべき悲惨な境遇を敢えて求めるまでもない。従つて、現世における良心の乱れは来世における地獄の影、あるいはその序説だと言える。我が身を跡形もなく滅ぼそうとする人々が示す、自己憐憫の情に満ちた意図を誰が憐れまずにいられようか。己に許されていることであれば、悪魔も同じ道を選ぶであらう。だが、それが叶わないことである以上、悪魔の悲惨に終わりはない。その傷つき得ないという属性、即ち不死性こそ、悪魔を最も苦しめるものである。

(1) 『マルコ福音書』五・九。

(2) マーティン三〇九ページによれば、アナクサゴラスとアナクシマン드로スが混同されている。複数の世界の存在についてアナクサゴラスの見解は曖昧であるが、アナクシマン드로スはそれを確信していた。

(3) 『ルカ福音書』八・二。

## 第五十二節

私は地獄を恐れたことも、地獄の描写に顔色を失ったこともない。私はそれを神に感謝し、喜んでここに書き記すものである。ひたすら天国に思いを寄せてきたために、私は地獄という観念を殆ど忘れ、しかも、地獄の悲惨に耐えることよりも天国の喜びを失うことの方を恐れている。その喪失こそ完全な地獄に他ならず、これ以上何かを付け加えて私たちの苦悩を完璧にする必要などありはしなないと思われる。私は地獄という恐ろしいことばによって罪を控えたことも、その名を思つて善行に励んだこともない。私は神を敬つてはいるが、神を恐れてはいない。神の裁きを懸念して自らの罪におびえるよりも先に、私は神の慈悲を思い、罪を恥じる。裁きとは、神の叡智が已むを得ずお使いになられる第二の手段である。人間によって誘発された場合に、神はこれを最終的な治療法とされるのであるが、その目的は善人を神の崇拜に導くというよりは悪人を引き止めることにある。恐れおののく者が天国に迎え入れられたことなどかつてなかったのではないか。地獄のことなど一切構わず、ひたすら神に仕える者こそが、天国に至る道を順調に歩む。地獄を恐れる余り神にひれ伏す計算高い者たちは、神の僕と称してはいても、実際には全能者の奴隷に過ぎないのである。

## 第五十三節

偽りなく本心を述べるとすれば、自らの生涯の出来事を眺め、神の御指を思うとき、全人類、とりわけ私に対する神の慈悲の底知れぬ深さと大ききばかりが感じられてくる。自分自身の偏見に満ちた感情によるのか、神の慈悲についての屈折し歪んだ考えによるのかは不明であるが、ともかく他人が障壁、困苦、天罰、不運と呼んでいるものでさえ、目に見える結果に留まることなくさらに深く探求している私には、いずれも密かに形を変えた神の愛情を賜っていると思われたし、また結果的にその通りであることが明らかになってもいる。神の御業を感情に左右されずに正しく理解すること、さらに神の正義と慈悲とを識別し、そのような尊い属性に誤った名称を与えないことは知恵の特筆すべき課題である。とはいえ、神の手順に論議と検討を加え、裁きと慈悲が同一であることを見極めるのも、やはり論理の果たすべき真摯な役割であろう。神は最も優れた人が受けるに値するよりも多くの慈悲を極悪人に授けておられる以上、万人に対して慈悲深いはずだからである。また、神がこの世の誰にも罰を与えられないと言つても、それは逆説ではありながら不条理ではない。人を殺した者に対して判事が罰金だけを科したときに、これを罰と呼び、彼の寛大さを称えずに判決に不服を唱えるのは狂気の沙汰ではないか。同様に、私たちの罪は死どころか地獄をも免れないほど重大なものでありながら、寛大な神が損失、不運、病苦で私たちに立ち向かわれる他は全て見逃して下さっているとすれば、

ば、これを慈悲の極みと呼ぼずに神罰と呼び、神の慈悲の笏を称えずにその裁きの鞭の下で苦悶するのは何という狂気であろうか。従つて、神を敬い、称え、崇拜することは、私たちの本性、身分、境遇の負っている恩義を思えば、感謝の念を込めて果たすべき責務に他ならない。私はこのように考えるものである。それをよくご存じの神が、私の崇拜を拒絶されたりはしないであろう。私が天国とその幸福に与かるといふのは偶然の所産であり、私の信仰の意図するところではあり得ない。その至福は私にふさわしいものではなく、また自らを謙虚に省みれば、期待を寄せることすら叶わないものであろう。私たちの誰もが行き着く二つの果ては、それが神からの褒賞であろうと罰であろうと、慈悲深く定められ、私たちの営みには不釣り合いなところとして設けられているからである。即ち、一方は私たちの長所には過分なことこの上なく、他方は私たちの短所を考へれば限りなく軽いと言わざるを得ない。

#### 第五十四節

キリストを信じない者に救いはない。このことはキリスト降誕以降だけでなく、神学の断定する通り、それ以前についても当てはまると言う人がいる。だとすれば、キリストの化肉以前に死を迎えた有徳の人々や哲学者たちの行く末が大いに懸念される。地上における徳の Handbook となつたほどの、立派な生涯を送つた人々の魂が地獄に置かれるのは忍び難い。思ふに、地獄にある数々の区域の中には、彼らのためにリンボと称する場所が定められていたはずである。彼

らの手による詩の虚構が現実となつたり、彼らの空想や想像から生れた復讐の女神が本物の悪魔に變つたりするさまを目にするというのは、何とも異様な光景ではないか。彼らが一度も耳にしたことのないアダムのために苦しみを受けるとき、また、系譜を辿れば神々に由来するはずの自らが、実は罪深い人物の不幸な末裔であると知らされたとき、アダムの物語はどれほど奇異に聞えることであらう。神の御業に異を唱えたり、その手順の正当性を詮索したりするのは、理性の傲慢な振舞である。私を教え導いた謙譲の念に他人も従い、創造主と被造物との間の測り知れない無限の隔たりに思いを巡らし、あるいは「器が陶工に『なぜ私をこのように作つたのか』と問い掛けるであらうか」という聖パウロの直喩を真剣に考えるならば、理性の不遜な議論は制御されるであらう。また、行く先が地獄であれ天国であれ、私たちが神の揺るぎない裁きを論議することもないに違いない。人間が理性の正しい規則と規範に則つて生きるのは、自らの種にふさわしい生き方をしていのに過ぎず、それは己の本性の処方方を正しく守っている獣たちの場合と何ら変わるところがない。だからこそ、人間が理性の自然な指令に従つたところで、当然のことながら、自らの行動に対する報酬を求めたりは出来ないのである。結局、あらゆる救いはキリストを通してもたらされるであらうし、また、絶対にならなければならない。これが真実であることを、先に述べた有徳の人々の偉大な例が示しているに違いない。即ち、この世における所業が完璧なものであつたからといって、天国に迎えられる権利や資格は必ずしも与えられはしないということを実証していると思われる。

1 ターナー「地獄篇」四では、善行<sup>1</sup>がありながらキリスト教の洗礼を受けなかった者の魂が地獄の第一園にあるリンボ（辺獄）に置かれている。プラウソンの記述はこれを踏まえていると思われる。

(2) 『ローマ』九・二〇—一。

(3) この部分の句読法は各版によって異同が見られるが、訳文は *Sir Thomas Browne: Religio Medici, Hydropathia, and The Garden of Cyrus*, ed. Robin H. A. Robbins (Oxford: Clarendon Press, 1972), p. 57 の読みに従っている。

## 第五十五節

実を言えば、彼らにしても他の誰にしても、その生涯が常に自らの規範と呼応していた、あるいはあらゆる点でそれと符合していたなどとは思われない。アリストテレスが彼自身の倫理の規則から逸脱していたことは明白である。ストア派は激情を断罪し、フアラリス<sup>2</sup>の雄牛の中にあっても笑えと命じているが、その彼らでさえ結石や疝痛の発作を苦悶せずには出来なかった。自分たちが何も知ってはいないと断言した懷疑派は、他ならぬその見解によつて矛盾を犯していながら、同時にこの世の誰よりも多くのことを知っていると自認していた。ディオゲネースは当代一の虚栄家であり、あらゆる名譽を拒絶した点で、一切を拒まずに受け入れたアレクサンドロスにも勝る野心を抱いていた<sup>3</sup>と思われる。悪徳と悪魔は私たちの理性に誤謬を纏わせる。そして、一刻も早くそれから逃れるよう駆り立てることで、私たちをさらに深く陥れてしまふ。ヴェ

ネッツイア国の総督は黄金の指輪を用いて海との婚礼を挙げるが、国家にとつて有効かつ重要な式典である以上、贅沢だとそれを咎めるつもりはない。だが、貪欲を避けるために金銭を海に投げ込んだあの哲学者<sup>4</sup>は、浪費家として悪名高かった。美德に通じる大道や手近かな道がある訳ではない。この罪という、蜘蛛の巣にも似た難問から自らを解き放つのは容易な技ではない。信仰の場合と同様に、全き美德に至るためには、総具足によつて防備を完璧に整えることが必要とされる。一つの悪徳に向かつて堅い防御の姿勢を取ると共に、別の悪徳の突きに対しても無防備にならないためである。実際、自らを導くべき理性の糸を備えた分別ある賢者が赦し難い罪を犯す一方で、劣った者が躓きながらも不名譽を免れる場合もある。一つの善行が成立するためには、多くの状況が整わなければならない。従つて、善人になることは学業を修めることに他ならず、私たちは書物によつて徳を身に付けることを強いられているのである。また、人間の営みは理論と歩調を合わせないどころか、しばしばそれに逆らつて突進することさえある。生来、私たちは何が善であるかを承知していながら、悪を追い求めるように生まれついてしまつてもいる<sup>5</sup>。他人を説き伏せるための修辭で自らを説得するというのは、私には不可能である。私たちの内には邪悪な欲望が潜んでおり、それは理性の賢明な指図に忍耐強く耳を傾けながらも、己の放埒な気分れに従つて行動する。要するに、私たちは皆怪物、即ち人間と獣とが合わさった存在なのである。それをわきまえた上で、私たちは、詩人たちが空想するあの賢者ケイローン<sup>6</sup>となり、人間としての領分を獣としてのその上位に据え、感覚を理性に従属させることに努



めなければならぬ。最後ながら、私は誰もが救われることを神と共に切望してはいるが、それが叶う者など殆どいないであろうことを人々と共に納得せざるを得ない。生命に至る橋は狭く、その道は細いのである。それにも拘らず、神の教会を特定の国家、教会、家族に敢えて限定しようとする人々は、私たちの救世主が意図されたより以上にその道を狭めてしまふに違いない。

- (1) アリストテレスは『ニコマス倫理学』八・一〇・一一三において専主制を非難しながら、アタルネウスの暴君ヘルメイアースに庇護を頼み、恥ずべき関係を結んでいたという。
- (2) 紀元前六世紀のシチリアの君主。火刑の道具として青銅製の雄牛を用いたという。
- (3) ルーキアノス『死者の対話』一三。
- (4) 紀元前四—三世紀のテーバイの哲学者（ディオゲネース・ラエルティウス『哲学者伝』六・八七）。
- (5) 『エペソ書』六・一二三。
- (6) 『ロマ書』七・一九、オウイデイウス『変身譚』七・二〇—一を踏まえた表現。
- (7) ケンタウロス一族の賢者の名前。
- (8) 『デモテ前書』二・三—四。
- (9) 『マタイ福音書』七・一四。

## 第五十六節

神の教会をストラポンの外套<sup>1</sup>に包み、それをヨーロッパだけに限

定するといった通俗的な判断しか出来ない人々は、世界の半分すら征服していないのに全世界を手中に収めたと考えたアレクサンドロスと変わるころがなく、地理に疎いのではないか。使徒たちの遍歴、殉教者たちの死、多くの人々による数々の集会、あるいは私たちが改革派の立場からしても正当だとされている、あのキリスト教の黎明期にアジアとアフリカ各地で開かれた会議を念頭に置けば、それらの地域における神の教会を否定出来ないはずである。人間の目には止まるが、恐らくは神のご判断にとつては問題とならないような二、三の相違点があるからといって、互いを天国から排除すべきではない。ある意味では全員が殉教者であつたキリスト教徒の場合<sup>2</sup>はなおさらである。私たちが日光の下で神を称えているだけなのに較べ、彼らは迫害を受けながらも立派に信仰を貫き、炎の中にあつても神に仕えたのだ。確かに私たちは皆、多くの人々が選ばれ、大勢が救われると考えている。だが、私たちのさまざまな見解を一纏めにしたところで、その錯綜した事態から救済と呼べるようなものが現れてくるはずはないし、誰一人として救われもしないであろう。まず、ローマ教会が私たちを断罪し、私たちも同じく彼らを断罪するからである。また、さらなる改革を唱える者や非国教徒は、私たちの教義が永遠に呪われるべきだと主張し、アトミー派<sup>3</sup>あるいは愛の朋派<sup>4</sup>がこれらの全てを非難する一方で、非難された側もそれに応酬するという現実もある。こうして、神の慈悲が私たちに天国を約束されているにも拘らず、私たちの観念や見解が私たち自身をそこから締め出している。ここに至っては、一人の聖パウロだけでは足りないに違いない。個々の教会や宗派が天国の門を奪い合い、

互いに排斥し合いながら天国の鍵を回しており、私たちも互いの意思、観念、見解に逆らいつつ、天国を目指している。しかも、無知であると共に無慈悲であることによって、自らの救済の問題だけでなく他人のそれについても過ちを犯しているのではないか。

- (1) 『地理学』二・五・一四において、ストラボン<sup>1</sup>は世界の形を丈の短い外套に譬えているという。
- (2) 数々の迫害に遭遇した初期キリスト教徒を指している。
- (3) 『マルコ福音書』一三・二〇。
- (4) 不詳。十七世紀前半に普遍救済説を唱えた教祖的人物アトミー夫人に從う者たちを指すとか、アトミー派 (Atonist) がアダム派 (Asanist) の誤記であると考えような諸説がある。
- (5) オランダに始まり、十六、十七世紀にヨーロッパ各地に広まった一宗派。信仰は愛の営みに由来すると唱えていた。

## 第五十七節

人間の立場から見れば地獄に落とされて当然でありながら、実は救われる者が多くいること、また、人間の見解や判決では選ばれていながら、神に拒絶される者も少なくないことを私は信じている。終末の日には、神の正義と慈悲の思いもよらぬほど不可思議な例が見られるであろう。従って、いずれにせよこれら二つを取って定義しようとするのは、人間にあつては愚行であり、悪魔たちにおいてさえ僭越な振舞いに他ならない。鋭く微妙な洞察力を備えたそれらの悪霊が知恵を絞ったところで、誰が救われるかを推測することなど

医師の信仰 (その二) (生田省悟・宮本正秀)

ど不可能である。仮にそれを予知出来るのであれば、彼らの労苦は終わり、貪り食らうべき獲物を求めて地上をさまよい歩く必要もなくなるであろう。律法を嚴格に適用してソロモンに永遠の罰を宣告する人々は、ソロモンだけに留まらず、彼ら自身と全世界を断罪することになる。文字に記された神のおことばによれば、私たちは一人の例外もなく死すべき境遇に置かれているからである。だが、神は大権をお持ちであり、御心のままにご自身の掟の字句を超越される。私たちは、ひたすらこれだけを頼りとして救いを求めなければならぬ。また、これによってソロモンも、彼を断罪した人々と共に容易に救済に与かることが出来るに違いない。

- (1) 『ペテロ第一書』五・八。
- (2) 『ヨブ記』一・七、二・二。
- (3) ソロモンは洗礼を受けなかったというのが、その理由である。

## 第五十八節

救済を求める人の多さと、この針の穴を潜り抜けようとする無数の群衆に私はただ驚嘆するばかりであつた。「小さき群れ<sup>1</sup>」という呼称に、私の信仰は慰めを見出すどころか、落胆を覚えてしまう。取るに足らない我が身を振り返るときなどなおさらである。謙虚に考えてみれば、そうした人々の誰よりも私は劣っているのだ。天国に無秩序などあるはずもなく、むしろ天使に位階があるように、聖者にも序列があるに違いないと私は信じている。だからといって、(明

言しておくが)私は天国の最高位に昇り詰めるなどといった野心を抱いている訳ではない。私の望みは最後の一人となって天国の末席に到達することに過ぎず、それだけで私は幸せなのである。

(1) 『マタイ福音書』一九・二四。

(2) 『ルカ福音書』一一・三二。

(3) デイオニシウス・アレオパギタ『天上の位階』六一八。

## 第五十九節

さらに、私は自らが救われることを堅く信じ、十分に納得してはいるが、敢えて誓いを立ててまでそれを断言するつもりはない。私はコンスタンティノープリスという都市の存在をまさに確信し、一部の疑念も抱かずに受け入れてはいるが、誓いを立ててそれを断言するのは、ある種の偽誓となるのではないか。その確実性を納得するに足る動かし難い根拠を、私自身の感覚から引き出すことが出来ないからである。多くの人々が救済に与かるための絶対的な確証を求めてはいるが、謙虚な魂の持ち主が何の価値もない自分自身を顧みれば、確かに多くの疑念に遭遇するであらうし、「恐れおののきつつ、汝の救いを成し遂げよ」という聖パウロの教えさえ殆ど必要とはしていないことに突如として気づくであらう。私が選ばれる理由とは、とりもなおさず私が救われる理由だと思われる。しかも、それは私の生まれる前に、あるいは世界の構築に先立って、神が施された慈悲と恩寵に他ならない。「アブラハムの生まれ出でた以前より

我はある」とはキリストの語られたおことばであるが、私が同じことを自分自身について言ったとしても、ある意味からすれば間違っているのではない。この世に生まれる以前どころかアダムよりも前に、私は神のお考えの中に、また永遠の昔から催されているあの会議<sup>2</sup>で定められた布告の中に存在していたからである。この意味からすれば、世界は創造されるよりも前に存在し、始まりの以前に終わりを迎えていたと言える。かくして私は誕生に先だって死を迎えたのであり、たとえ墓がイングランドにあったとしても、私の死に場所は樂園に他ならない。エヴァはカインを孕むより先に、私を月足らずで生み落としたのであった。

(1) 『ピリピ書』二・一二。

(2) 『ヨハネ福音書』八・五八。

(3) 「会議」とは、「我らの像に、我らに似せて、人を作ろう」(『創世記』一・二六)などを踏まえたものであろう。

## 第六十節

善行を公然と非難し、信仰だけを頼みとする不遜な狂信者たちでさえ、神からの報酬を退けてはいない。信仰の効能を当てにする彼らが神に契約の履行を強要し、はなはだ詭弁的な手法で天国を求めているように思われるからである。犬のように舌で水を舐めた者だけがミデアン人を滅ぼす名督に値すると神は定められた<sup>1</sup>。だが、その名督を正当に求め得た者、また、自らがそれにふさわしいと想像

し得た者は誰一人としていなかった。真の信仰として神が私たちに求められているものとは、救済に値する徴や証しだけではなく、その手段でもあることを私は否定しない。とはいえ、それをどこで見出すべきかなどというのは、自分自身の末路と同様、私の知るところではない。私たちの救世主が使徒や付き従う人々に向かって、山を動かし得る信仰は芥子一粒ほどの量でしかないことを示されたのであれば、私たちの誇っているものなど何の意味もなく、せいぜいで無と紙一重と言うべきであろう。以上が私の信仰の概要であるが、奇異な点、あるいは常軌を逸した気質を反映した箇所も多いと思われる。だが、より成熟した方々の見識と合致しないのであれば、私はこれを放棄することに吝かではないし、優れた学識をお持ちの方々の承認を頂かない限り、拙論を推し進めるつもりもないのである。<sup>3)</sup>

(1) 『士師記』七・四―七。

(2) 『マタイ福音書』一七・二〇。

(3) 既に指摘した通り、「読者諸賢へ」の終わりでも、これと同じ趣旨のことが述べられている。

(第一部完)